

小学校外国語活動における児童の不安軽減に関する実践研究

千葉奈津江 岡崎浩幸

小学校外国語活動における児童の不安軽減に関する実践研究

千葉奈津江¹ 岡崎浩幸²

Practical Research for Reducing Children's Anxiety in Elementary School Foreign Language Activities

Natsue CHIBA and Hiroyuki OKAZAKI

摘要

本研究の目的は児童が外国語活動の授業に対してどのような不安を持ち、その不安に対してどのような手立てが不安の軽減に役立つのかを明らかにすることである。小学校3・4年68名を対象に2か月授業を実施した。結果として、不安が高いのは「答えが分からない時に当てられる」「1人で発表する」場面で、手立てとして外国語学習における「失敗することの大切さ」を頻繁に伝えたり、「頑張っていたことや励ましの言葉」を児童の振り返りカードに添えたりすることが有効であることが分かった。

キーワード：外国語不安、不安軽減の手立て、小学校、外国語活動

Keywords：foreign language anxiety, support for anxiety reduction, elementary school, foreign language activities

I. はじめに

令和2年度より新学習指導要領が全面実施となった。小学校においては、これまで高学年のみであった外国語活動が中学年でも本格的に始まり、移行期間中に高学年で学習した内容がそのまま中学年に降りてくる形となった。第1筆者の勤務校では、これまで外国語活動を担当したことの無い担任が不安を訴えており、児童にとっても初めての外国語体験で不安が高まることが予想された。教師、児童ともに経験のないことへの不安が高いと考えられる。

外国語に関する不安は、MacIntyre & Gardner(1989,1991)でも述べられているように、「外国語学習場面の特有の状況特定不安である」と考えられている。外国語の授業の特徴としては、日本語と違い、慣れない言葉を使用しなければならない。そこで、令和元年度末に、勤務校の児童の外国語活動に対する不安について事前調査を行った。

また、松宮(2005)では、「人前での口頭発表を中心に行われるため、他の教科学習に比べて、児童の不安を喚起しやすい側面がある」と述べられている。中学年以降も高学年、中学校英語科への継続を考えていく上で、外国語を使用してコミュニケーションを取る活動が増えていくと考えられる。まずは勤務校の中学年の児童の外国語への不安を軽減し、興味や関心を高める指導の工夫を試みたい。

表1は、令和元年度に勤務校で行った事前調査の結果である。2年生～6年生までの学年ごと、セクションごとの平均値を表でまとめた。質問項目は松宮(2010)の用いた5件法で3年生は不安項目の平均値が4.0、中学年・高学年の平均値は3.59だった。この結果からも不安に感じている児童が多く見られた。

表1：2年～6年への事前調査

	1興味関心	2不安	3困難時の対処	4求めたい支援	5困難時の支援
2年	3.93				
3年	4.40	4.00	3.15	3.51	2.98
4年	3.62	3.41	2.94	3.08	2.88
5年	3.32	3.52	2.90	2.94	2.67
6年	3.74	3.57	3.02	3.32	2.95
平均	3.75	3.59	2.99	3.19	2.87

II. 先行研究と研究目的

国内の先行研究としての松宮(2010)の研究では、小学校児童における外国語活動の不安について実態調査が行われた。協力対象は高学年約1500名であった。質問紙は5つのセクションからなり全部で47質問項目、5件法で行われた。この結果、「人前での発表に関する不安」、「分からない時に指名される不安」、「周りの評価に対する不安」の平均値が高く、5件法で「5」を選んだ児童数が全体の34%を超えた項目もあった。また、不

¹ 滑川市立寺家小学校教諭 ² 富山大学大学院教職実践開発研究科

不安を強くもつ児童は、「外国の人が話していることをもっと分かるようになりたい」、「英語の本や外国からの手紙を読めるようになりたい」、「英語でもっとたくさん話ができるようになりたい」という質問項目で平均値が4.1を超えており、興味や意欲も高いことが示された。

北條(1995)では、英語学習の不安やその原因、不安を与える教師の性格、態度について報告されている。それによると、最も不安を強く感じる学習活動は、英語を話したり書いたりすることである。特に話す活動では、「突然、英語で発言するよう指名される」、「みんなの前で英語で話す」、「英語で意見を発表したり寸劇を演じたりする」、「準備してきた英会話を授業中、全員の前で発表する」ことに強く不安を感じていることが明らかになった。不安を感じる理由としては、「まちがったり、変なことを言ったりして恥をかきたくない」、「みんなの前で英語を話すのは理屈抜きで嫌だ」、「先生やクラスメートに英語ができないと思われたくない」である。逆に「グループで練習する」、「教師の後について繰り返す」、「ビデオを見たりテープを聞いたりして学習する」、「英文を黙読する」という活動に対してあまり不安を感じていないことが明らかになった。

国外では台湾の事例がある。台湾は、2001年より小学校高学年において外国語の学習が始まっている。Chan & Wu(2004)は外国語に関する不安について、5年生を対象に6件法の質問紙を用いて調査を実施した。結果として、小学校児童の不安の要因が5つ明らかになった。「自分の英語力が低いから」、「クラスメートからの評価が低いから」、「ゲームに勝ち負けがあるから」、「心配性の性格だから」、「クラスメート、親からのプレッシャーがあるから」が要因として挙げられている。

小学校外国語(英語)の不安に関する研究はまだ少数に留まっている。外国語活動が全面実施となってからの研究は今後増えていくのではないかと考えられる。このような中で、外国語全面実施後の児童の不安の実態を解明することに意義があると思われる。また、自ら授業実践を通して児童の不安を軽減できるのかどうかについても検討する。そのために勤務校で中学年の授業を実践しながら、不安軽減のための手立ての有効性を検証する。研究課題(リサーチクエスト)は以下の通り設定した。

- (1)勤務校A小学校の3,4年児童は、外国語にどのような不安をもっているのか。
- (2)勤務校A小学校の3,4年児童の不安を軽減するために、どのような手立てが有効なのか。

Ⅲ. 研究方法

Ⅲ. 1 研究協力者

研究協力者は勤務校のA小学校中学年3年生1クラス33名、4年生1クラス35名からなっている。第1筆者

は3年生、4年生ともに週に1回の授業を行った。どちらとも活発な児童が多いクラスである。そのため、ゲームやコミュニケーション活動などを通して楽しく学ぶことができれば、外国語に対する興味・関心が高くなるのではないかと考えた。

Ⅲ. 2 方法

Ⅲ. 2.1 不安に関するアンケート

5件法の質問紙を作成し、児童が外国語活動に対してどのような不安をもっているかについての実態を知る。

表2：不安に関する質問内容

	質問内容
1	みんなの前で1人で発表する時、緊張する
2	先生に当てられるかもしれないと思ったら、どきどきする
3	1人で発表して間違ったら恥ずかしい
4	1人で発表するとき、みんながどう思うか気になる
5	新しい言葉を覚えられない時、心配になる
6	先生が英語で言ったことがわからないと不安になる
7	みんなの前で1人で発表するのは、どきどきする
8	答えが分からない時、当てられたらどうしようと思う
9	みんなの前で間違っ、笑われるのが怖い
10	他のみんなの方が自分より英語が上手だと思う
11	習った言葉を忘れてしまった時、不安になる
12	ALTの先生が話していることが分からない時不安になる
13	みんなの前で発表する時、どきどきして上手く言えない
14	他の勉強より英語の時間の方が緊張する

質問紙は松宮(2010)を参考に事前調査の結果を踏まえ児童の実態を考慮し作成した。不安に関する質問項目は14項目ある(表2)。分類すると「人前で話すことへの不安(1、7、13)」、「指名されることへの不安(2、8)」、「間違っことへの不安(3、9)」、「周りの評価に対する不安(4、10)」、「覚えていないことへの不安(5、11)」、「先生の話したことが聞き取れないことへの不安(6、12)」である。14項目はこの不安が英語独自のものなのかどうかを知るために加えた。不安に関するアンケートは、事前と事後の2回行った。

Ⅲ. 2.2 手立てに関するアンケート

表3のアンケートは児童の外国語に対する不安が軽減された原因を明確にするために12回目の授業後に行った。手立てとして行った10項目について、児童がどの手立てにより不安が和らいだのかを調査する。

これらの手立ての内容は、事前調査の結果を参考に考案した手立てである。児童には1つ1つの項目について説明を加えながら答えさせた。以下は児童に説明した内容である。

表3：手立てに関するアンケート

	質問内容
1	外国語の授業の1回目に千葉先生から「英語は失敗をしても大丈夫」という話を聞いたから
2	授業中、不安なときに「大丈夫」など、励ましの声をかけてもらったから
3	「友達が失敗しても、絶対に笑ってはいけない」と言われていたから
4	イアン先生と千葉先生が英語で話す見本を見たから
5	ふりかえりカードには、がんばっていたことや励ましの言葉を書いてもらったから
6	がんばっていた様子は、担任の先生にも伝えてもらったから
7	ペアで話すときには、お互いに教え合って進めてもいいと言われていたから
8	1人1人が言えるかどうかを先生たちで手分けして確認してもらい、できたらシールをもらえたから
9	もう少し練習がほしいときに、練習時間を増やしてもらったから
10	ふりかえりカードには、困ったことや分からないことを書けたから

- ①**外国語の意義** 授業の初回には、パワーポイントを使って説明をした。これまで9～10年間学んできた日本語でさえ、まだ上達途中であること、始めたばかりの外国語はすぐには上手にならないこと、失敗して当然であることなどを話した。しかし、外国語を学べば約15億人の人と話すことができることも伝えた。
- ②**授業中の励まし** 授業中は常に失敗をしても大丈夫であること、上手く言えなくても大丈夫であることを言い続けた。
- ③**他者の失敗は笑わないこと** 授業中に失敗するのは当たり前なので、他者の失敗に対して笑わないことを児童たちに伝え、徹底した。
- ④**ALTと担任の会話** 担当者が積極的にALTと話す姿を見せた。身近な存在が話す姿から、自分でもできそうだと安心できるのではないかと考えた。
- ⑤**振り返りへのコメント** 振り返りカードへは、児童へのコメントだけでなく、児童が授業中に頑張っていた姿に対して褒めたり励ましの言葉を添えたりした。
- ⑥**担任への報告** 外国語活動の授業の様子を担任にも伝えた。特にがんばっていた様子は担任から子供たちへも再度、褒めてもらえるようにした。
- ⑦**ペア活動での教え合い** 授業中には、ペア活動を必ず入れ、英語で会話をするコミュニケーションの時間を確保した。その際に、不安な事や分からない事はペアの人に聞いたり、近くの人に聞いたりしてもよいことにした。
- ⑧**担当者3人での確認の場の設定** 2週間に1度は担当者が3人になった（専科、英語支援員、ALT）。担当者1人あたり11人程度の児童を見ることができた。授業の内容で分からないところはないか、ペアで話す時に不安はないかなどを担当者が確認した。

担当者が確認した。

- ⑨**練習時間の確保** ペアとの会話前には、心配な言い方、分からないこと、もう少し練習が必要かどうかを児童に尋ね、必要な場合には、英語支援員やALTと繰り返し練習する時間を取った。
- ⑩**振り返りカードへの不安や困ったことの記入** 毎時間の振り返りの時には、その時間を振り返り、困ったことや不安に思ったことはないか声をかけた。積極的に不安や困ったことを書くように伝えた。そのため、振り返りカード（図1）は、その日の授業の姿を振り返りやすいように選択性のものでし、困ったことや不安だったことを書ける時間を確保できるようなカードにした。困ったことや不安に思ったことを書いてくれた児童がいた場合には、「素直に書いてくれて助かった。嬉しかった」と伝えた。そうすることで、周りの児童たちも書きやすくなったと思われる。

図1：振り返りカード

English Lesson Card					NAME	
Date	相手(先生)の顔や○○などを見ながら話した。	少しでも外国語を使って話した。	相手が話したときに必ず話した。	目標だったことを今日までに言っていた。	Good Job Person (**▽**)	Comment (うまくいったこと、わかったこと、こまったこと、次がんばりたいことなど何でも書きましょう(▽▽))
／	4 (△)	4 (△)	4 (△)	4 (△)		
()	3 (△)	3 (△)	3 (△)	3 (△)		
	2 (△)	2 (△)	2 (△)	2 (△)		
	1 (△)	1 (△)	1 (△)	1 (△)		
／	4 (△)	4 (△)	4 (△)	4 (△)		
()	3 (△)	3 (△)	3 (△)	3 (△)		
	2 (△)	2 (△)	2 (△)	2 (△)		
	1 (△)	1 (△)	1 (△)	1 (△)		
／	4 (△)	4 (△)	4 (△)	4 (△)		
()	3 (△)	3 (△)	3 (△)	3 (△)		
	2 (△)	2 (△)	2 (△)	2 (△)		
	1 (△)	1 (△)	1 (△)	1 (△)		
	4 (△)	4 (△)	4 (△)	4 (△)		

Ⅲ. 3 授業内容

令和2年度、コロナウイルスの影響で授業は5月下旬から始まった。それまでの間、休校中はYouTubeで1回行った。外国語活動は初回のみYouTubeで行い、再開後は週に1回、1学期は全部で12回の授業を行った。児童が見通しをもてるように授業の流れはおよそ同じ流れで行った。毎回の授業前に授業の内容を黒板の左隅に書いて進めた。スモールトークでは、その日のゴールとなる姿を英語支援員、ALTまたは専科である第1筆者が見せて明確になるようにした。また、短い時間でも必ず最後にはコミュニケーション活動の時間を取り入れて、友達と会話する楽しさを味わわせるようにした。

授業の流れはおおむね以下の順であった。

- ①あいさつ
- ②スモールトーク

- ③目当ての確認
- ④チャッツ
- ⑤慣れ親しみのゲーム
- ⑥コミュニケーション活動
- ⑦ふりかえり
- ⑧あいさつ

IV. 結果と考察

IV. 1 アンケート結果

表4は、3年不安に関する記述統計（平均、SD、t検定）の結果である。

事前アンケートでは、項目14の「他の勉強より英語の時間の方が緊張する」を除いて、項目の平均値は全て3.0を越えていた。項目3の「1人で発表して間違ったら恥ずかしい」では、平均値がもっとも高く4.57であった。

事前アンケートで平均値4.0を越えた5項目は、事後アンケートではすべて3.0以下に減少した。他の項目においても事前アンケートより事後アンケートの平均値が下がった。事前と事後アンケート結果を比べると、統計上の有意な差が見られたのは次の5項目であった。

項目2「先生に当てられるかもしれないと思ったら、どきどきする」、項目3「1人で発表して、間違ったら恥ずかしい」、項目8「答えが分からない時、あてられたらどうしようと思う」、項目9「みんなの前で間違っ、笑われるのがこわい」、項目11「習った言葉を忘れてしまったとき、不安になる」において不安が減少したと言える。不安に関する質問14項目を松宮が分類した項目「指名されることへの不安（2、8）」、「間違っことへの不安（3、9）」については、統計上有意な差が認められた。

表4：3年 不安に関する記述統計（平均、SD、t検定）

3年	Pre		Post		平均-平均	Z値
	平均	SD	平均	SD		
1 みんなの前で1人で発表する時、緊張する	3.89	1.32	3.71	1.44	0.18	0.57
2 先生に当てられるかもしれないと思ったらどきどきする	3.82	1.44	3.14	1.48	0.68	0.03 *
3 1人で発表して間違ったら恥ずかしい	4.57	1.08	3.86	1.33	0.71	0.03 *
4 1人で発表するときみんながどう思うか気になる	3.46	1.61	3.46	1.48	0	1.00
5 新しい言葉を覚えられない時心配になる	3.68	1.60	3.43	1.57	0.25	0.45
6 先生が英語で言ったことがわからないと不安になる	3.50	1.38	3.32	1.49	0.18	0.54
7 みんなの前で1人で発表するのは、どきどきする	4.18	1.47	3.74	1.48	0.44	0.22
8 答えが分からない時、当てられたらどうしようと思う	4.39	1.14	3.79	1.32	0.60	0.01 **
9 みんなの前で間違っ、笑われるのが怖い	4.39	0.90	3.96	1.24	0.43	0.03 *
10 他のみんなの方が自分より英語が上手だと思う	3.43	1.27	3.21	1.63	0.22	0.57
11 習った言葉を忘れてしまった時、不安になる	4.07	1.00	3.14	1.60	0.93	0.01 **
12 ALTの先生が話していることが分からない時不安になる	3.64	1.49	3.00	1.60	0.64	0.09
13 みんなの前で発表する時、どきどきして上手く言えない	3.57	1.50	3.39	1.47	0.18	0.41
14 他の勉強より英語の時間の方が緊張する	2.57	1.64	1.96	1.38	0.61	0.06

*p<0.05

表5は、4年不安に関する記述統計（平均、SD、t検定）

の結果である。事前アンケートでは平均値4.0を越えていたのは、項目8「答えが分からない時、当てられたらどうしようと思う」のみで平均値は4.11であった。逆に一番平均値が低いものは、項目14「他の勉強より英語の時間の方が緊張する」で2.31であった。事後アンケートでは、平均値4.0を越えていた項目8「答えが分からない時、当てられたらどうしようと思う」は、3.66に下がった。11項目において事前の平均値より事後の平均値が下がっていた。事前アンケートと事後アンケートを比べると、項目4「1人で発表するとき、みんながどう思うか気になる」、項目8「答えが分からない時、当てられたらどうしようと思う」において、有意傾向が認められた。

表5：4年 不安に関する記述統計（平均、SD、t検定）

4年	Pre		Post		平均-平均	Z値
	平均	SD	平均	SD		
1 みんなの前で1人で発表する時、緊張する	3.94	1.33	3.69	1.53	0.25	0.24
2 先生に当てられるかもしれないと思ったら、どきどきする	3.31	1.43	3.26	1.42	0.05	0.80
3 1人で発表して間違ったら恥ずかしい	3.71	1.32	3.66	1.39	0.05	0.73
4 1人で発表するとき、みんながどう思うか気になる	3.54	1.42	3.20	1.39	0.34	0.10 †
5 新しい言葉を覚えられない時、心配になる	3.66	1.41	3.34	1.45	0.32	0.24
6 先生が英語で言ったことがわからないと不安になる	3.11	1.45	3.00	1.39	0.11	0.64
7 みんなの前で1人で発表するのは、どきどきする	3.80	1.35	3.57	1.55	0.23	0.25
8 答えが分からない時、当てられたらどうしようと思う	4.11	1.21	3.66	1.37	0.45	0.09 †
9 みんなの前で間違っ、笑われるのが怖い	3.49	1.44	3.63	1.46	-0.14	0.44
10 他のみんなの方が自分より英語が上手だと思う	3.86	1.33	3.63	1.31	0.23	0.41
11 習った言葉を忘れてしまった時、不安になる	3.43	1.38	3.11	1.30	0.32	0.19
12 ALTの先生が話していることが分からない時不安になる	3.09	1.40	3.03	1.28	0.06	0.80
13 みんなの前で発表する時、どきどきして上手く言えない	3.17	1.30	3.20	1.49	-0.03	0.87
14 他の勉強より英語の時間の方が緊張する	2.31	1.33	2.46	1.05	-0.15	0.53

†p<0.1

図2：不安項目12項目全体の平均値の比較

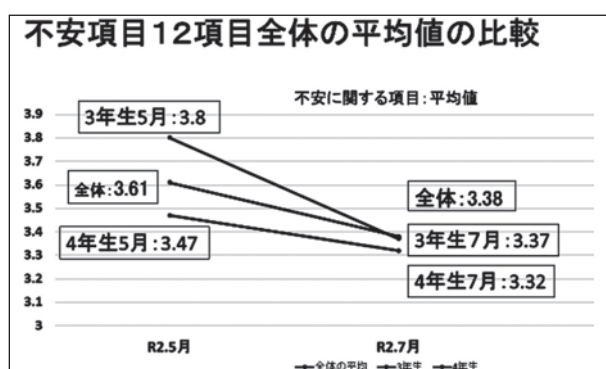


図2は、12項目ある不安項目全体の平均値を表したものである。

5月の3年生の平均値は3.8、4年生の平均値は3.47、全体の平均値は3.61であった。7月の3年生の平均値は3.37、4年生の平均値は3.32、全体の平均値は3.38である。不安項目全体の平均値で事前と事後を比較すると、3年生は平均が下がり不安が減少したと言えるが、

4年生はわずかな減少に留まった。

IV. 2 手立てに関するアンケート結果

1学期の授業の終わりに、どの手立てによって児童の不安が低減したのかを明らかにするために事後アンケートを実施した。表6は3年生の不安が減少した原因についての結果である。3年生の人数の50%以上を超えた「すごくそう思う」を選択した項目には色を付けて表示した。

3年生では、33人中20人が「授業の初回の話」、「失敗は笑わない」ことを理由として「すごくそう思う」を選んだ。手立てとして挙げていた10項目中の7項目で半数以上の児童が「すごくそう思う」を選んだ。合計では、全ての項目において80%以上の児童が手立ての効果を認めていた。

表6：3年生 不安減少の原因とその割合

項目	◎すごく そう思う	○そう思う	計
1 授業初回に話	20(60.6%)	13(39.3%)	33(100%)
2 授業中の励まし	17(51.5%)	15(45.4%)	32(96.9%)
3 失敗は笑わない約束	20(60.6%)	12(36.3%)	32(96.9%)
4 ALTと話す姿を見せること	16(48.4%)	15(45.4%)	31(93.9%)
5 振り返りへのコメント	19(57.5%)	12(36.3%)	31(93.9%)
6 がんばりを担任に伝えること	13(39.3%)	17(51.5%)	30(90.9%)
7 ペアでの教え合い推進	17(51.5%)	13(39.3%)	30(90.9%)
8 担当3人での1人ずつの確認	17(51.5%)	14(42.4%)	31(93.9%)
9 練習時間の確保	15(45.4%)	13(39.3%)	28(84.8%)
10 困ったこと、不安の記入推進	17(51.5%)	11(33.3%)	28(84.8%)

表7は、4年生の不安が減少した原因についての結果である。4年生の人数の40%を超えた「すごくそう思う」を選択した項目は、3項目あった。4年生では、35人中17人が「ALTと話す姿を見せること」、14人が「初回に話」、「担当3人で1人ずつ確認する」を不安解消の理由として選んだ。全ての項目において半分以上の児童がその効果を認めていた。

表7：4年生 不安減少の原因とその割合

項目	◎すごく そう思う	○そう思う	計
1 授業初回に話	14(40.0%)	13(39.3%)	27(77.1%)
2 授業中の励まし	11(31.4%)	17(48.5%)	28(80.0%)
3 失敗は笑わない約束	11(31.4%)	12(34.2%)	23(65.7%)
4 ALTと話す姿を見せること	17(48.5%)	11(31.4%)	28(80.0%)
5 振り返りへのコメント	13(37.1%)	9(25.7%)	22(62.8%)
6 がんばりを担任に伝えること	7(20.0%)	11(31.4%)	18(51.4%)
7 ペアでの教え合い推進	11(31.4%)	9(25.7%)	20(57.1%)
8 担当3人での1人ずつの確認	14(40.0%)	10(28.5%)	24(68.5%)
9 練習時間の確保	13(37.1%)	14(40.0%)	27(77.1%)
10 困ったこと、不安の記入推進	6(17.1%)	14(40.0%)	20(57.1%)

IV. 3 結果の考察

研究課題「どのような不安をもっているか」、「どのような手立てが有効なのか」に沿って、結果について学年ごとに考察を述べる。

(1) 3年生

3年生では、事前アンケートの結果から「間違いへの恐れ」が2つの項目で平均値4.3以上と高かったため、「失敗は笑わない」「間違えても大丈夫」ということについて、初回に話をしたり授業中に繰り返し伝えたりしたことが不安減少の結果に大きく結びつたのではないかとと思われる。

今回の結果は松宮(2010)でも述べられているように、項目8「答えが分からない時、当てられたらどうしようと思う」項目でも平均値が4.39と高く、松宮の調査した高学年と今回調べた中学年という学年の違いはあるが、外国語の学習不安という点において同じ結果が得られたと言える。反対に項目9「みんなの前で間違えて、笑われるのが怖い」では、松宮の結果は、平均値が2.92と低く、間違えることへの強い恐怖心は認められなかったが、勤務校の3年生では、平均値4.39と高い結果となった。新しい教科に対する恐怖心や間違えることへの恐れや不安感が高い平均値となって表れたのではないかと考えられる。この項目では、事前と事後の比較では有意な差が見られた。これは、手立てとして行った10項目の中の特に「授業初回に話」、「失敗は笑わない約束」の手立てについて全体の6割の児童が不安軽減の原因として挙げていることから有効な手立てであったと考えられる。

また、不安減少の原因として5割以上を選んだ「ペアでの教え合い推進」、「担当者3人での1人ずつの確認」、「困ったこと、不安の記入推進」も児童の不安を減らすことにつながったと考えられる。

質問項目11「習った言葉を忘れてしまった時、不安になる」においても有意な差が認められた。この不安が軽減された原因として考えられるのは、5割以上の児童が選んだ2つの手立て「ペアでの教え合い」、「担当者3人での1人ずつの確認」がペアや教師から支援を得ることができるため有効であったと考えられる。常に児童たちへ「分からないことは聞いてよい」、「教えあってよい」と伝えたことで、友達に聞くのは恥ずかしいことではないことが児童たちの中に浸透し、「分からないことは友達に聞く」という自ら進んで質問をする態度へとつながっていったのではないかと考える。

特に外国語活動が始まる3年生においては、授業前に「間違えて当たり前だということ」や「失敗して当たり前だということ」、それとともに「失敗は笑わないという約束をする」など、始まる前に話をしておくことが有効であることが分かる。また、授業中には、分からないことは友達に聞くことに慣れておくことで

「分からないからどうしよう」という不安もある程度は解消されるのではないかと考えられる。

(2) 4年生

4年生では、事前のアンケートで「分からない時、当てられたらどうしようと思う」の項目で平均値が4.11と1番高かった。次に平均値が高かったのが「みんなの前で1人で発表する時、緊張する」で平均値3.94、「他のみんなのほうが自分より英語が上手だと思う」で平均値3.86と、周りの友達のことを気にしていることが分かる。平均値が高い理由として2つのことが考えられる。1つ目は、外国語活動の学習は2年目を迎えているが、週に1度だけ話す程度では児童の緊張感や不安感はあまり変わらないのではないかと考えられる。2つ目は他の児童のことを気にすることによる羞恥心が原因であると考えられる。そのため、分からない時や周りの目が気にならないような手立てとして、「授業初回の話」や「失敗は笑わない約束」、「ペアでの教えあい」、「担当者3人での1人ずつの確認」、「練習時間の確保」、「困ったこと、不安の記入推進」などの手立てを取り入れた。

不安に関するアンケート結果の前後の比較では、項目4「1人で発表するとき、みんながどう思うか気になる」と項目8番「答えが分からない時、当てられたらどうしようと思う」において有意な傾向を示した。また、「授業初回の話」、「担当者3人で1人ずつ確認」について全体の4割の児童が不安が減少した原因として挙げており、「ALTと話す姿を見せる」について全体の5割の児童が不安現象の原因として挙げている。このことから、これらの手立てが有効であったのではないかと考えられる。

4年生は、不安項目14「他の勉強より英語の時間の方が緊張する」において事前事後のアンケートの平均差が-0.15とマイナスの平均値が増えた中では一番大きな差になっている。SDで比べても1.33であったのが1.05とばらつきの幅が狭くなっている。この部分において3年生との違いが見られた。これは、4年生が3年生以上に周りの目を気にしていることも1つの原因ではないかと思われる。それに加えて、自然に話せる日本語での自己表現とは違い、英語独特の自己表現になるためではないかと考えられる。

(3) まとめ

研究課題(1)と(2)についてまとめる。研究課題(1)勤務校A小学校の3、4年児童は、外国語にどのような不安をもっているかについては、特に3年生では、人前や間違えることへの不安をもっており、4年生では、人前や間違えることへの不安が高かった。研究課題(2)勤務校A小学校の3、4年児童の不安を軽減するためにどのような手立てが有効かについては、3年生では初め

ての外国語活動の授業であるため、うまくいかないのは当たり前であることを受け入れたり認めたりすること、4年生ではモデルを示し目標となる姿やゴールなどの見通しがもてること等の手立てが有効だった。

V. おわりに

V. 1 教育的示唆

児童の外国語活動に対する不安を少しでも軽減できればと思い、今回の授業実践を計画した。今回取り入れた手立ては、既に他教科でも行われているものもあると思われる。特に外国語科、外国語活動においては言語活動が中心となる。活発に話せない児童や失敗を恐れる児童がいることを念頭におき授業を計画することで、児童の不安を取り除いていくことができると思われる。特に外国語活動が始まる3年生や初回の授業における説明などで、その有効性が示された。3年生に対して、初回の授業に対して教員がどのように児童たちに向き合い、どのような話（心構えや外国語学習の意義など）をしていくのかが大きな鍵となる。

また、学期の途中から取り入れたルーブリックを活用したスピーキングテストは、児童にとっては自信をつける場となり、教員にとっては授業改善のための手がかりとなることが分かりつつある。トライアンドエラーを繰り返し、児童自身が自分の成長を感じられる場として小学校外国語科、外国語活動においてもスピーキングテストの取り入れ方を考えていくが必要になると思われる。

V. 2 今後の展望

中学年の外国語活動に対する不安の現状とその手立てについては、授業実践を通して明らかにしたが、高学年への効果は明らかにはなっていない。今回の質問紙により市内の高学年の外国語不安に関する状況把握はできている。今後は高学年の外国語科に対する不安軽減についての研究・実践が必要である。高学年の外国語科は中学年の外国語活動とは内容も変わっており、観点別に3段階で明確に評価される。他教科のように評価が入り中学年とは違う不安も出ると考えられる。高学年の外国語科においても不安をどのように解消していけばよいのか、中学年と同じような手立てが有効かどうかについても調べる必要があると思われる。滑川市内の小中学校英語関係者と情報交換をしながら、児童にとって効果的な方法を取り入れた授業実践を確立していきたい。

参考文献

- 一般社団法人学び続ける教育者のための協会 (REFLECT) (編)『リフレクション入門』学文社
- 河内千栄子 (2016)「英語学習に対する学習者の不安要因：専攻、性差、およびその変化」久留米大学外国語教育

研究所紀要第 23 号, 15-40

熊田岐子・岡村季光 (2017) 「英語スピーキングに対する不安尺度作成：小学校英語の教科化に向けて」奈良学園大学紀要第 7 巻, 67-74

近藤真治・楊瑛玲 (2003) 「大学生を対象とした英語授業不安尺度の作成とその検討」JALT Journal 第 25 号, 187-196

田辺尚子 (2017) 「小学校学級担任の外国語に対する不安を軽減するための研修に関する一考察」安田女史大学紀要 45, 99-108

北條礼子 (1995) 「外国語（英語）学習に対する学生の不安に関する研究(5)」上越教育大学研究紀要第 15 巻, 第 1 号 163-174

松宮奈賀子 (2005) 「小学校英語活動における児童の不安の強さと意欲の関係」広島大学院教育学研究科紀要 第二部 文化教育開発関連領域 (54), 157-164

松宮奈賀子 (2005) 「児童が不安を感じる英語活動場面とその要因の模索」日本児童英語教育学会研究紀要 (24), 57-69

松宮奈賀子 (2010) 「小学校外国語活動における児童の不安に関する実態調査」広島大学大学院教育学研究科紀要, 第一部, 第 59 号, 107-114

松宮奈賀子 (2012) 「小学校外国語活動における児童の「不

安」に関する課題と支援の在り方」広島大学大学院教育学研究科紀要, 第一部, 第 61 号, 107-114

文部科学省 (2019) 『小学校学習指導要領（平成 29 年度告示）解説 外国語活動・外国語編』 開隆堂

文部科学省 (2019) 『新学習指導要領リーフレット』

山森光陽 (2004) 「中学校 1 年生の 4 月における英語学習に対する意欲はどこまで持続するのか」教育心理学研究, 52, 71-82

Chan, D. Y. C., & Wu, G. C. (2004). A study of foreign language anxiety of EFL elementary school students in Taipei County. *Journal of National Taipei Teachers College, 17*(2), 287-320.

MacIntyre, P. D., & Gardner, R. C. (1989). Anxiety and second-language learning: Toward a theoretical clarification. *Language learning, 39*(2), 251-275.

MacIntyre, P. D., & Gardner, R. C. (1991). Methods and results in the study of anxiety and language learning: A review of the literature. *Language learning, 41*(1), 85-117.

(2021年 8 月30日受付)

(2021年10月 1 日受理)

